

三水村遺跡発掘調査報告書 第1集

# 鐘山遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984・3

三水村教育委員会  
鐘山遺跡発掘調査会

三水村遺跡発掘調査報告書 第1集

# 鐘山遺跡

——緊急発掘調査報告書——

1984・3

三水村教育委員会  
鐘山遺跡発掘調査会

## 序

三水村の最南西に位置し北側は掘削られ国道18号線が走り南には鳥居川が輝いて流れているこの小高い水田地帯が埋蔵文化財緊急発掘調査事業として発掘調査された鐘山遺跡のあとである。

今度鐘山地区土地改良事業が実施されるにあたり急撃三水村は調査団を編成し地権者各位の御理解と御協力を得て発掘にとりかゝった。調査団長に富士里小学校教頭岩佐今朝人先生、調査員に百瀬忠幸、横山かよ子、三ツ井きみ子諸氏を委嘱し4月10日より4月28日までの19日間の予定で実施をした。調査員の皆様方には春まだ浅く五山よりふきおろす寒風の中献身的努力をいたゞき埋蔵文化財の発掘調査が終ることが出来ました。たゞたゞ感謝にたえません。

地方の時代が叫ばれ、ふるさと回帰運動が唱えられているとき百瀬忠幸調査主任の御努力により鐘山遺跡の発掘調査報告書が刊行されることになりました。感慨無量なるものがあります。

文化財に対する認識を深め三水村の歴史を探求するための一助となれば幸ります。

最後に鐘山遺跡発掘にあたり御指導をいたゞきました県文化課(県史刊行会)樋口昇一指導主事先生を始め調査員の皆様方村内外の皆様方の御労苦と御努力に重ねて心から謝意を申上げ序といたします。

昭和59年2月20日

三水村教育委員会

教育長 渋沢 静雄

## 例　　言

- 1 本書は、鐘山地区耕作者組合が昭和58年度に実施した非補助土地改良事業に先立って、記録保存のため、三水村が行った緊急発掘調査事業の報告書である。
- 2 整理作業分担は下記のとおりであり、原稿の執筆分担はその文末に氏名を記してある。
  - ・整理復元作業 百瀬忠幸、三ッ井きみ子、横山かよこ
  - ・全体図・遺構図の作成・トレス 百瀬忠幸、柴　哲、山田敏明
  - ・遺物実測・トレス 土器…土井義行、石器…鴨原靖彦、石川由美子、百瀬忠幸
  - ・写真図版作成は百瀬忠幸があたった。
  - ・写真撮影は、百瀬忠幸が担当した。
- 3 本書に掲げた遺構実測図等におけるレベルは海拔高を表し、方位は磁北を示す。
- 4 グリッドは任意の1点を基準点とし、その基準点を中心に磁北を南北の基線に、それと直交する東西のラインをもう一方の基線として、基準点から2m間隔に設定した。
- 5 今回発掘された資料については、河野喜映・佐々木藤雄両氏の御教示・御指導を賜った。記してお礼申し上げる。
- 6 本書の編集は主として百瀬忠幸が行い、岩佐今朝人が総括した。
- 7 出土遺物および実測図等は、三水村教育委員会が一括して保管している。

# 目 次

序

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過（調査日誌より）	2
第2章 遺跡の環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第3節 村内の遺跡	8
第3章 発見された遺構と遺物	10
第1節 層 序	13
第2節 遺 構	13
1. 土 壢	13
2. ピット群	17
3. 配石遺構	20
4. 性格不明の落ちこみ	26
第3節 遺構外出土遺物	28
1. 繩文時代の遺物	28
2. 平安時代の遺物	29
第4節 小 括	30
第4章 結 語	32

## 挿図目次

第1図 遺跡附近地形図	5	第16図 1号配石	20
第2図 鐘山—鳥居川模式断面図	6	第17図 1号配石出土土器	21
第3図 周辺遺跡分布図	9	第18図 2号配石	21
第4図 鐘山遺跡発掘調査位置図	10	第19図 2号配石配石部および掘り方	22
第5図 遺跡全体図・セクション図	11	第20図 2号配石出土土器	23
第6図 遺物分布図	12	第21図 2号配石出土石器(1)	24
第7図 1号土壙	13	第22図 2号配石出土石器(2)	25
第8図 1号土壙出土土石器	14	第23図 性格不明の落ちこみ	26
第9図 2・3号土壙	14	第24図 性格不明の落ちこみ出土土器	27
第10図 4号土壙	15	第25図 遺構外出土土器(1)	28
第11図 5号土壙	16	第26図 遺構外出土土器	29
第12図 ピット群出土土石器	17	第27図 遺構外出土土器(2)	29
第13図 ピット群	18	第28図 遺構外出土鉄製品	29
第14図 ピット群出土土石器	19	第29図 遺構外出土銭貨	29
第15図 ピット群出土銭貨	19		

## 図版目次

図版1 鐘山遺跡の空撮
図版2 鐘山遺跡（上：遠景 南から、下：近景 北から）
図版3 1～3号土壙及びピット群（上：北から、下：西から）
図版4 4号土壙
図版5 上：炭化米・銭貨出土状態、下：1号配石
図版6 2号配石
図版7 2号配石
図版8 鐘山遺跡出土遺物-1 (1:3, 4~6・12は1:2)
図版9 鐘山遺跡出土遺物-2 (1:3)
図版10 鐘山遺跡出土遺物-3 (1:4, 2~8は1:2)
図版11 鐘山遺跡出土遺物-4 (1:4, 銭貨は1:1)
図版12 上：調査風景、下：調査団員

## 第1章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

昭和57年10月、三水村文化財調査員久遠氏から“五輪塚で耕地整理事業が計画されている。”との情報がもたらされ、関係者に照会したところ補助事業外全額受益者負担による耕地整理事業が計画され、しかも収穫後直ちに着工したいと言うことであった。

この地域は、河川改修工事などの際、かつて土器・石器類が出土した実績があり、埋蔵文化財包蔵地として周知の遺跡であるため、直ちに県教委文化課に連絡、御指導を仰ぐとともに受益者と協議、10月21日には臼田指導主事の現地調査をいただき、また、12月22日には県教委、地教委、受益者三者立合のもとに数ヶ所の試掘を実施した結果、うち2ヶ所で土器片などを発見したため試掘ヶ所を中心に調査区域を設定、58年4月中に発掘調査を実施することになった。

その後文化課、県史刊行会、樋口指導主事の御紹介をいただいて調査担当者も決定、3月18日には“鐘山遺跡発掘調査会”の初会合を行い、4月11日から現場での表土剥ぎを実施、以後悪天候に悩まされながらの発掘調査となつた。  
(事務局)

### 第2節 調査体制

#### 鐘山遺跡発掘調査会

顧問	篠原 行雄	(村長)
委員	小林 豊太	(教育委員長)
"	石川 俊夫	(教育委員長職務代理者)
"	小林 誠	(教育委員)
"	相沢 栄位	( " )
"	波澤 静雄	(教育長)
"	久遠 義正	(文化財調査員)
"	村松 直康	( " )
"	高野 誠	( " )
"	小林 平吉	( " )
"	山岸 齊	(関係地主)
"	中川 功	( " )

委 員 伊 藤 和 男 (関係地主)

" 北 沢 達 男 ( " )

事務局

三水村教育委員会事務局

#### 調査団

調査団長 岩 佐 今朝人 (日本考古学协会会员)

調査主任 百瀬 忠幸

調査員 横山 かよ子

" 三ッ井 きみ子

調査協力者 平林 彰 (日本大学卒), 土井義行 (東海大学研究生), 小磯 学, 倉橋 純 (以上,  
東海大学学生)

### 第3節 調査経過 (調査日誌より)

4月12日 (火) 晴 発掘調査関係者一同三水村公民館に集合ののち、発掘現場への資材・器具の搬入、ならびにテントの設営を行う。調査着手式終了後直ちに調査を開始。発掘区を中心と周辺部を含めた地形測量を行うとともに、それと並行して発掘区の東側よりバックホーにて表土層を剥ぐ。遺構は不検出。夕刻より公民館にて調査団と事務局との親睦会がもたれた。

4月13日 (水) 曇のち晴 昨日に引き続き表土除去作業を行う。グリッドの設定および遺構確認のための精査を開始する。第III層上面付近より、土師器、銭貨などが検出され始める。8Pグリッドからは縄文土器も出土し、調査の成果が期待される。

4月14日 (木) 晴 発掘区全体を精査。北西部において配石様の遺構および落ちこみを検出する。昨日出土分も含め、遺物を1点ずつドット図に記載するとともに、各々のレベルを測定する。

4月15日 (金) 雨 昨夜からの雨により現場の状態がおもわしくなく、本日の調査は中止とする。

4月16日 (土) 雨のち曇 雨のあがった午後より調査を再開。西側部分の精査をさらに進め、遺構のプラン確認に努める。

4月17日 (日) 雨のち曇 昨日同様、午前中は雨のため調査できず、午後からの作業となる。午後より、北西部を中心に精査を進め、土壌および多数のピットを検出した。ピット集中部お

よりピット確認面より土師器・砥石・粘土魂などが出土した。

4月18日（月）晴のち曇 発掘区北西側出土遺物の実測およびレベルの測定を行う。遺構・遺物の個別写真を撮影後、遺構プランの確認のため第V層まで掘り下げる。

4月19日（火）曇 北西部の出土遺物の取り上げ。7Pグリットおよび11~12K・Lグリットにおいて、配石様の遺構を検出し、その付近の拡張・精査にとりかかる。

4月20日（水）雨のち曇 午後より、昨日検出した配石様遺構およびその周囲の精査を続行し、全体の把握に努める。

4月21日（木）晴 発掘区西半部より検出されたピット群の半蔵、覆土観察を始める。東側より重機による掘り下げを開始し、精査の結果、7Pグリットから検出された配石様遺構の下部にはほぼ正方形を呈する土壠があることを確認した。11~12K・Lグリットの配石については、長径3m以上をはかる楕円形を呈するものと把握した。

4月22日（金）雨のち晴 午前中は雨のため、1時間ほどで作業を中止する。午後より作業を再開し、7Pグリットおよび11~12K・Lグリットから検出された配石遺構の写真撮影と北西部のピット群の完掘を行う。

4月23日（土）雨のち曇 発掘区東側を中心に上面確認を行うが、本日終了時点では新たな遺構は検出されなかった。ただし、6Rグリットを中心に土師器・灰釉陶器などが比較的まとまって出土した。

4月24日（日）快晴 本日より東海大学の学生2名を含む3名が新たに参加し、配石遺構やピット群などの実測を開始する。

4月25日（月）快晴 昨日に引き続き各遺構の実測を進める。一方、6R・3グリットにおいて性格不明の落ちこみが新たに検出された。

4月26日（火）快晴 各遺構および発掘区域の実測、写真撮影を終え、調査のすべてを終了する。なお、本日は地元の小学生（5・6年生）が見学に訪れるとともに、有線放送の取材があった。

4月27日（水）晴 テント等発掘資材・器具の撤収。

5月以降 遺物・測図・原稿執筆等の整理作業を行う。

(百瀬)

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

三水村は長野県の北部に位置し、斑尾山（1381.8m）南麓の2つの支脈を中心として広がる、面積35.66km<sup>2</sup>、東西6.95km、南北10.45kmのほぼ三角形に近い形をした村である。東部は下水内郡豊田村、南部は豊野町、西部は鳥居川を境として牛込村、北西部は信濃町にそれぞれ境をなしている。

地形を概観すると、長野盆地から飯山盆地西縁にかけて数段の浸食平坦面が広がっており、三水村もその一面を構成している。いわゆる鼻見面と呼ばれる平坦面は、鼻見城山（722.7m）に由来し、赤塩面も、三水村の大字にその名称が由来している。三水村は、北一西部が主として山地に、南部は平坦地に大別されるが、鼻見面が山地を形成しており、前述の鼻見城山、戸谷峰（756.0m）など標高700m前後の山がこれにあたる。また、赤塩面（およそ500～550m）はゆるやかな起伏をもった平坦部を形成しており、大部分の耕地が広がっている。三水村の地形は、北西部の鼻見面と南部の赤塩面で構成されているのである。

村内を流れる主な河川は、戸隠村越水ヶ原に源を発する鳥居川と村内芋川に源を発する斑尾川である（現在、斑尾川は堀越地籍を開削し、信濃町荒瀬原から斑尾山麓の水を引水している）。

鳥居川は、信濃町古間～牛込村小玉間と三水村並瀬～豊野町川谷の間で深く両岸を浸食し、V字形の渓谷をつくり出し、諸水を合わせて豊野町浅野で千曲川に合流する。また、その間上段盆地を冲積し、牛込・三水・豊野の流域沿岸では狭小な河岸段丘（河棚沖積地）をいくつか形成している。

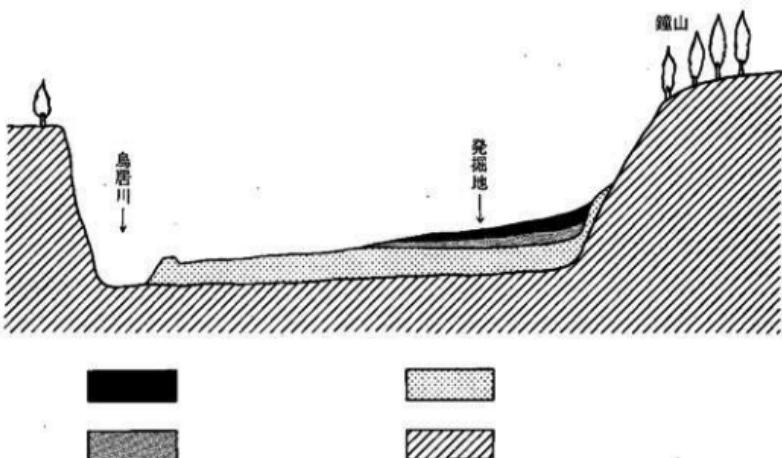
斑尾川は、芋川から倉井・赤塩と北から南東に貢流して豊田村に入り、斑川と合流して豊田村替佐で千曲川に合流する。

地質学的に見ると、新第三系の急斜した。しかも複雑な構造をした地層を基盤とし、その上位を不整合に飯綱・斑尾両火山起源の火砕岩類、泥流堆積物およびローム層が重なっている。黒姫・妙高火山起源の堆積物は層厚も数m程度とわずかで、ローム・スコリア・バミス層から成り、全体をうすくおおっている。

今回発掘した地域は、大字普光寺字五輪塚と呼ばれている。詳細は歴史的環境にゆずるが、康保年間（964）に性空上人が開基以後、永禄2年（1559）まで寺があったといわれ、工事をした際、多くの五輪塔が出土したことにより地名のおこりがあるらしい。また、裏手にあたる鐘山という地名も、当時、鐘つき堂があったことに由来しているといわれる。



第1図 遺跡附近地形図 (1 : 40,000)



第2図 鐘山一発掘地一鳥居川模式断面図

この度の緊急発掘調査は、付近一帯の構造改善事業のため行われたものであるが、畠地として利用されていた極めて狭小な地域の発掘であった。以下、具体的な環境にふれる。

発掘地は鳥居川左岸（北側）の河棚沖積地で、牛札村小玉付近で大きく蛇行するところである（第1図）。右側（南側）は十数mの高さの崖で、鳥居川の浸食を直接うけている攻撃斜面である。また、発掘地の北側には前述の鐘山が7～8mの高さで迫っており、一帯の河棚沖積地は南向きの日あたりのよい凹地となって好条件をもついている。したがって、鳥居川は鐘山から次第に南に開析していったことがわかる。さらに、鳥居川の河床より上位に、信濃町で見られる柏原黒色火山灰質起源と見られる黒色土が見られる。信濃町では、この火山灰層の下部～上部より縄文早期～後期の土器が出土していることから、断定はできないが、この河棚沖積が形成されたのは、縄文早期以前と考えられる。

遺物包含層は20～30cm厚の耕土と思われる火山灰質の黒色土と、鳥居川の河床礫層に挟在された、やはり火山灰質黒色土である。しかし、この包含層は鐘山に近い方では厚いが、鳥居川に近づくにつれて急激に消滅し河床礫が見えてしまい、発掘の現時点では限られた分布をしていることがわかった（第2図）。さらに、円礫が含まれず水の作用が考えられないこと、鐘山の丘陵部に同様な黒色土が見られないことから、この黒色土層は様々な条件下、特にふきだまりの状態で形成されたと考えるのが妥当であろう。

いずれにせよ、かつての鐘山は国道18号線の切り通しで真っ二つにされ、五輪塚には稻穂が黄金色に波打っている。

（小林 正昇）

## 第2節 歴史的環境

長野市から国道18号線を約16km北進すると、道は鳥居川を中に挟んで暫く国鉄信越線と並行して走る。山間約4kmを経て左側に牛札駅を見る辺から次第に視野が開けてくるが、このあたりが三水村の西南端大字普光寺の入口である。そしてなお1km弱新鳥居橋で村界を越え、鳥居川と信越線に別れを告げ、国道は更に新潟県方面へ北上するが、この橋の手前、切通しの南側、大きく屈曲した鳥居川に包まれた耕地が三水村大字普光寺 字五輪塚・字鐘山地蔵であり、字古城、字善知鳥など由緒あり気な字名を持つ耕地が連続している。

この五輪塚・鐘山地域では、かつて鳥居川改修時に五輪塔、石器、土器片等多數が出土、文化財包藏地として遺跡台帳に登載された。また、字鐘山の非耕地部分は、平安時代の天台宗寺院“普光寺”創建の地と伝えられている。三水村にはこの2遺跡を含む計31箇所の遺跡が周知されており、大字普光寺だけでも9箇所を数え、うち3箇所が寺院・居館址と目されるほか、残る6箇所は縄文～平安期の包藏地である。また、その他村内他地区の遺跡もその殆んどは縄文～平安期の包藏地とされており、城館址などはごくわずかである。

さて今回、緊急発掘調査を実施した鐘山には、寺伝によると正暦元年(990)年天台僧性空によって“普光寺”(性空山玄叟院)が創建され、普光寺村一円を寺領として大いに栄えたと云う。この寺はその後、天文年間に浄土宗知恩院未に転じ、同22(1553)年甲越の争いに巻き込まれて焼かれ、普光寺村字前林の通称堂屋敷に移転、更に慶安3(1650)年火災にあって、現在の字壇下地蔵へ三転、更に弘化4(1847)年多数の死者を出したいわゆる“普光寺地震”によって倒壊し、建物は再建したものとの文書類は殆んど消滅、更にここ10年来無住の寺と化している。

この鐘山、五輪塚から南鳥居川を隔てた牛札村牛札(もと北国街道牛札宿)には、かつて矢筒城があり、城主島津氏は普光寺村も一部領有し、寺院としての普光寺にも多大の保護を加え、16世紀初頭の永正年間に大いに修理の手を加えたと云う。ところが、それから30年ほど後には甲州武田との争いが北信にも及び、前記の経過を経てこの寺は二転、三転するが、この寺が移転した後のこの土地は、数戸の農家の居住地となり、1847年の“普光寺地震”迄は住宅があり、震災後生き残った人達が一段上の台地に移住し、それらの宅地も農耕地となつた。

わずか百数十年前まで現実に人が住み、現在迄耕作が続けられ、また、耕作者によるとこの土地は非常に保水力が弱く、何次にも亘って客土をし、小規模な耕地整理を実施しているとのことであり、遺跡が遺跡としてどの程度残存しているか不安を感じさせられた。また、当普光寺地区出身で長野県埋蔵文化財センター勤務の小柳義男氏の報告によれば、同じ普光寺地区内の西原遺跡(同氏の呼称は原西遺跡)で多數の土器・石器を採集、研究しておられるが、この他川入遺跡(小柳氏のいう寺坂西遺跡)、前林遺跡など専門家の手の入らない遺跡が周辺に点在しており、今後、専門家による調査、研究を大いに期待するものである。

(久遠)

### 第3節 村内の遺跡

三水村には下記に示した一覧表のごとく、30余りの遺跡が確認されている。それらは縄文時代の遺跡と平安時代の遺跡によってその多くが占められており、とりわけ平安時代の遺跡が占める割合の高いことは、縄文時代の遺跡が多く存在する県内的一般的なあり方を考えるとき、地域的な様相を強く指し示す事象として特に注意される。

(百瀬)

三水村遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時代	所 在 地	地 目	備 考
1	桜 煙 遺 跡	包蔵地	平安	倉 井 桜 煙	煙	
2	大 原 "	"	縄文・平安	" 大 原	煙・宅	
3	中 煙 "	"	縄 文	" 中 煙	煙	
4	与四郎屋敷 "	居館址	歴 史	" "	"	
5	一 ツ 屋 "	包蔵地	縄 文	" 一 ツ 屋	"	
6	閥取場 経 塚	経 塚	近 世	" 閥取場	"	
7	上赤塙 遺 跡	包蔵地	縄 文	赤 塙 上赤塙	煙・宅	
8	瘤屋敷 "	"	平 安	" 瘤屋敷	平	
9	毛 見 "	"	縄 文	" 毛 見	煙・水田	
10	東柏原 "	"	"	東柏原	煙	
11	天 沢 "	"	"	" 天 沢	山 林	
12	上今田 "	"	"	赤 塙 上今田	煙	
13	東 原 "	"	平 安	普光寺 東 原	"	
14	西 原 "	"	縄 文	" 西 原	"	
15	古 城 "	"	"	" 古 城	水 田	
16	五 輪 塚 "	"	歴 史	" 五 輪 塚	"	
17	川 入 "	"	縄 文	" 川 入	"	
18	堀 の 内 居館址	居館址	歴 史	" 久留馬(堀)	宅	
19	普 光 寺 墓	寺院址	"	" 鐘 山	煙・山林	
20	前 林 遺 跡	包蔵地	縄文・平安	"	山 林	
21	寺 村 "	"	縄 文	芋 川 寺 村	煙	
22	芋川氏居館址	居館址	歴 史	" 田 中	宅	
23	鼻 見 城 跡	城 跡	"	" 鼻見城跡	山 林	
24	小 野 遺 跡	包蔵地	縄文・平安	" 小 野	水 田	
25	赤 兀 "	"	縄 文	" 赤 兀	山 林	
26	京 洛 "	"	"	" 京洛山之神	煙	
27	天 神 "	"	縄文・平安	" 天 神	"	
28	伊豆ヶ入 "	集落址	"	" 伊豆ヶ入	"	
29	若 宮 城 墓	城 跡	歴 史	" 若 宮	山 林	
30	入 土 橋 遺 跡	包蔵地	平 安	" 入 土 橋	煙	
31	菖 蒲 田 "	"	"	普光寺 菖蒲田	水 田	
32	鎌 山 遺 跡	寺院址?	平 安	" 五 輪 塚	"	

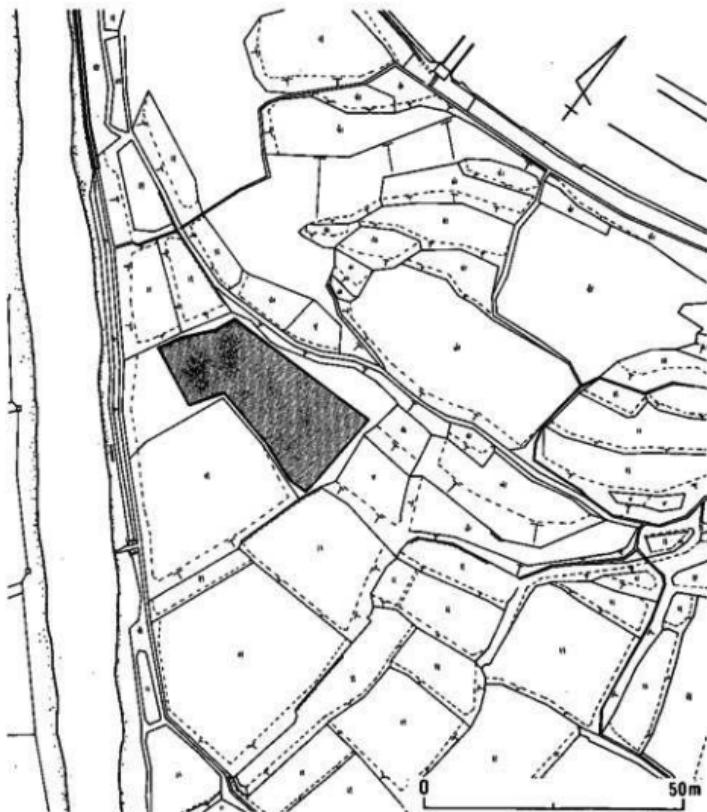


第3図 周辺遺跡分布図 (1 : 40,000)

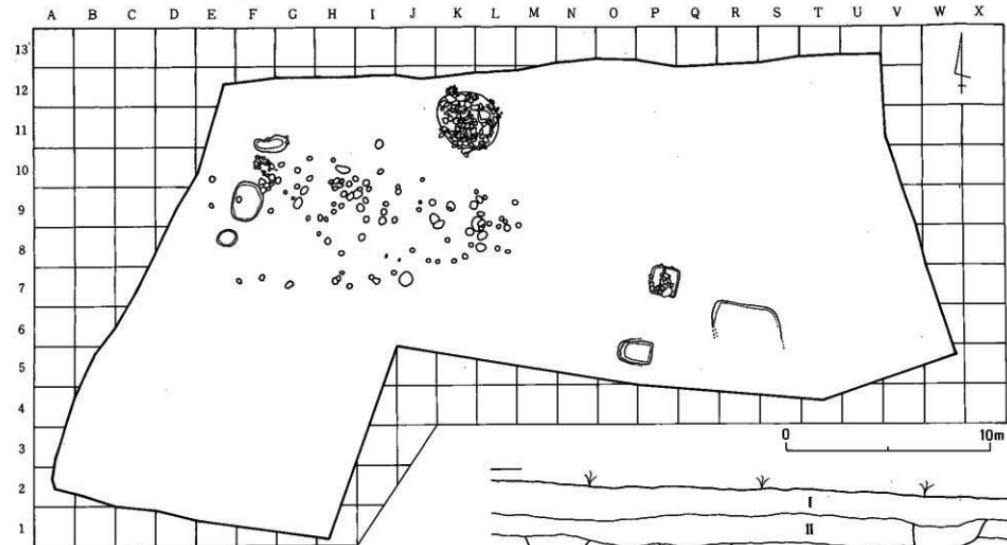
### 第3章 発見された遺構と遺物

長野県上水内郡三水村、鐘山遺跡に対する今回の発掘調査は、耕地整理事業に対する事前の記録保存を目的として実施された。事業対象地区のうち、遺物の出土が確認されていた西端部附近を中心に、総面積 660m<sup>2</sup> 余りの発掘区を設定して行われ、2週間にわたる調査により、土壙 5 基、ピット群 1、配石遺構 2 基、性格不明の落ちこみ 1 基が検出された（第4・5図）。

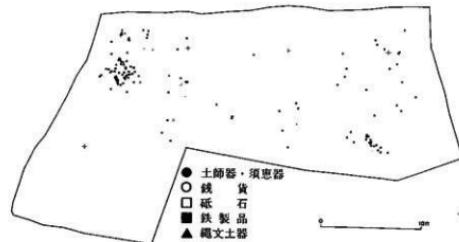
以下、層序および検出された遺構と遺物についての個別的な説明を試みることとする。



第4図 発掘調査区域図



第5図 遺跡全体図・セクション図



第6図 遺物分布図 (1:200)



## 第1節 層序

鐘山遺跡は先にも述べたごとく、鳥居川に面して位置し、背後の丘陵状平坦面から供給される土砂と大きく蛇行して流れる鳥居川の堆積作用とによって形成された狭小な平坦部に立地している。したがって遺跡内における土層も一様ではなく、比較的複雑な堆積状況を呈している。

基本的な層序は第5図に示すとおりであり、北側から南側へゆるやかに傾斜する二次堆積砂礫ローム層上にのっていることを除けば、発掘区の西側と東側とでは堆積状態に大きな差異が認められる。とりわけ、東側は表土層をのせる第II層：暗茶褐色土下に、小礫ないし砂粒を多く含む土層がほぼ傾斜にそって堆積しているほか、さらにその下部には、火山灰性の粒子の粗いザラザラとした黒色土が60~70cmと厚く堆積していた。

一方、西側部分の第III層上面には、ピット群の上部を中心として、炭化物とやや褐色をおびた灰白色粒土粒が面的な広がりをもって存在しており、また、ピット群の掘り込み面も第III層上面にあることから、第III層上面にひとつの生活面が存在したことが理解された。この点に関しては、第II層直下であるという点において東側部分も同様であり、基本的には同一の生活面ないし遺構構築面を共有していたものと考えられる。

なお、河川の流路に近い発掘区の南端部にはローム混りの二次堆積砂礫層の著しい発達が認められた。

(百瀬)

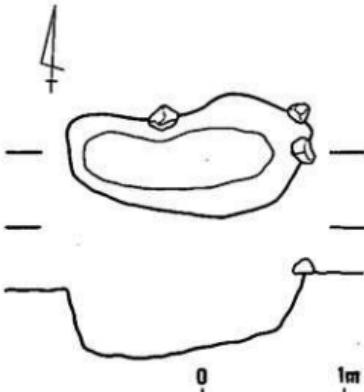
## 第2節 遺構

### 1. 土 壤

#### 1号土壤 (第7・8図)

遺構(第7図) 発掘区北西部、11Fグリッドを中心に検出された。平面形は不正長円形を呈し、長径170cm、短径60~80cmをはかる。横底は西側にゆるく傾斜しており、深さは40~50cmをはかる。壁は急傾斜で立ちあがり、断面逆台形を呈す。土壤掘り込み面に拳大の石が数個遺存していた。覆土には、ローム粒を含む黒~暗褐色の砂質土の堆積がみとめられた。

出土遺物(第8図) 確認面下より大形の砾石が1点検出された。一方の端部を欠損する



第7図 1号土壤

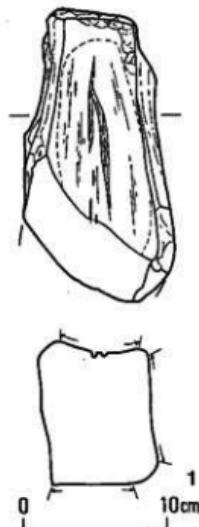
が、現在長最大19cm、最大幅10cmをはかる。断面はほぼ正方形を呈する。長軸面3面が底面として使用されており、各底面には長軸方向を中心に砸ぎ方向を示す磨滅が認められるほか、1面には幅1~数mmの「V」字状ないし「U」字状を呈す溝が数条残されている。このほかに、土壌上部の耕作土中より石臼が1点出土しているが、本址との関係は不明である。 時期 不明。

## 2号土壙

造構(第9図) 8Eグリッドに、3号土壙に南接して存在する。確認面は第III層上面であり、周囲に硬化面の広がりが認められた。平面形は不正橢円形を呈し、長径103cm、短径86cmをはかる。深さは21cmと浅く、ローム層をわずかに掘り込むのみであった。覆土には指頭大のロームブロックを含む黒褐色土が堆積していた。

出土遺物 なし。

時期 不明である。



第8図 1号土壙  
出土遺物(1:4)

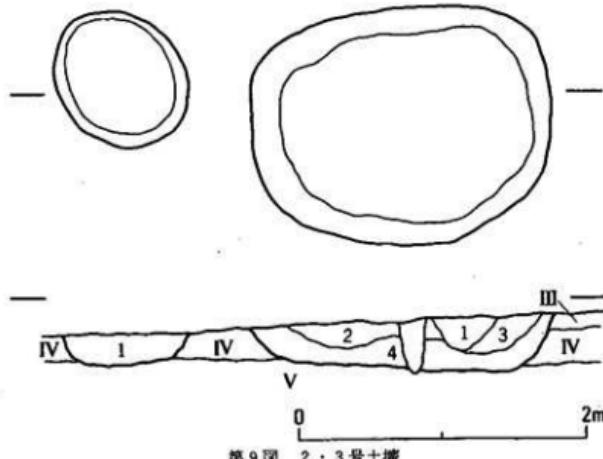
## 3号土壙(第9図)

造構(第9図) 1号土壙の南西側、9Fグリッドを中心に存在する。平面形は脛の張る隅丸長方形を呈する。壙底はほぼ平坦であるが、壁との境はゆるやかなカーブを示す。覆土は4層に分かれる。第1

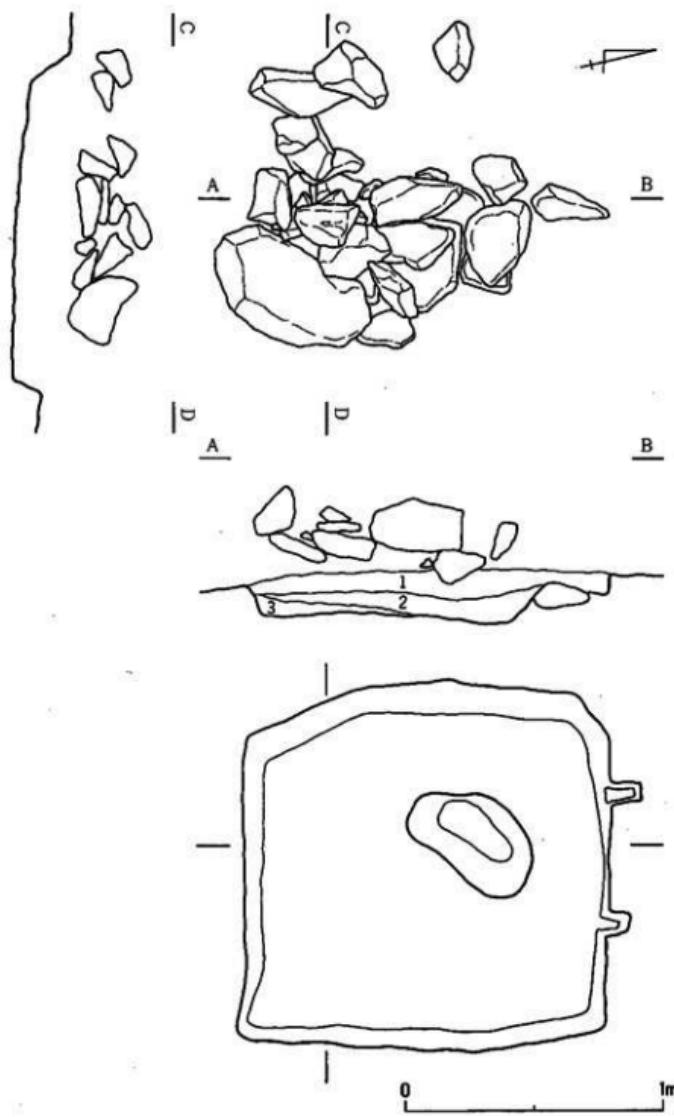
層 ローム層を含む黒褐色土、第2層 ローム粒を含む暗褐色土、第3層 ロームブロックを含む暗褐色土、第4層 ロームブロックと黒褐色土を含む暗褐色土である。本址の性格および他造構との関係は不明である。

出土遺物 なし

時期 不明



第9図 2・3号土壙



第10図 4号土壤

#### 4号土壙(第10図)

造構(第10図) 発掘区中央部やや南東寄り、7Pグリッドに位置する。規模は140×141cmの不正方形を呈し、深さは確認面より15~20cmをはかる。北側に2ヶ所の突出部を有する。壁は比較的急傾斜で立ちあがっており、壙底との境も明瞭である。壙底より20~25cmほど浮いた状態で、20~70cmの自然石が土壙プランに沿うように存在していた。石の数は20個あまりを数える。覆土は3層に分かれる。第1層 暗褐色土(しまり硬・粘性やや有)、第2層 黒褐色土(しまり硬・粘性有)、第3層 褐色土(しまり硬・粘性有)である。

出土遺物 なし

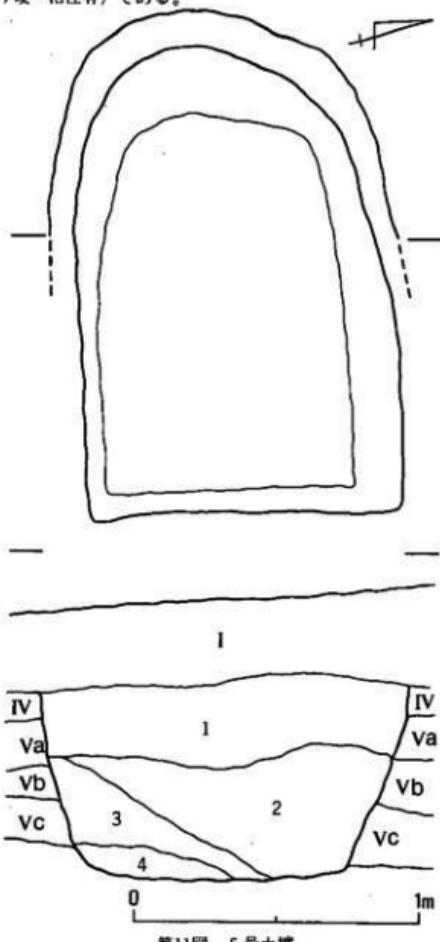
時期 不明である。

#### 5号土壙(第11図)

造構(第11図) 50・Pグリッドに存在し、セクション面において表土層下の第IV層から掘り込みが検出された。北西側には2~3mほど離れて4号土壙と性格不明の落ち込みが検出されているが、本址を含めて主軸方位をほぼ同じくする。平面形は東側がやや張って隅丸状を示すものの、おむね不整長方形を呈する。長径約180cm、短径約130cm、壁高70cmを測る。壁は比較的急傾斜に掘り込まれているが、壙底との境はややカーブを示す。壙底はほぼ平坦である。覆土は4層に分かれた。第1層 暗褐色土、第2層 砂質黒色土をブロック状に含む黒褐色土、第3層 黒褐色土、第4層 ローム粒を含む暗褐色土である。

出土遺物 なし。

時期 不明である。

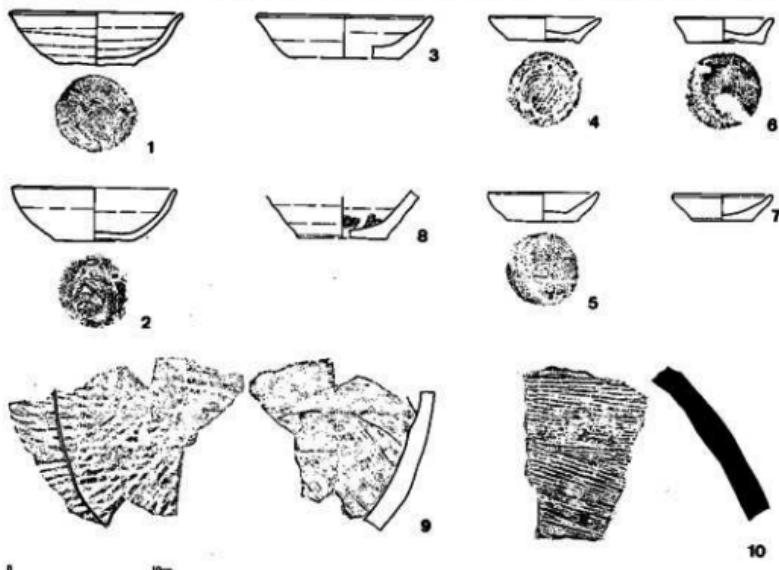


第11図 5号土壙

## 2. ピット群 (第12~15図)

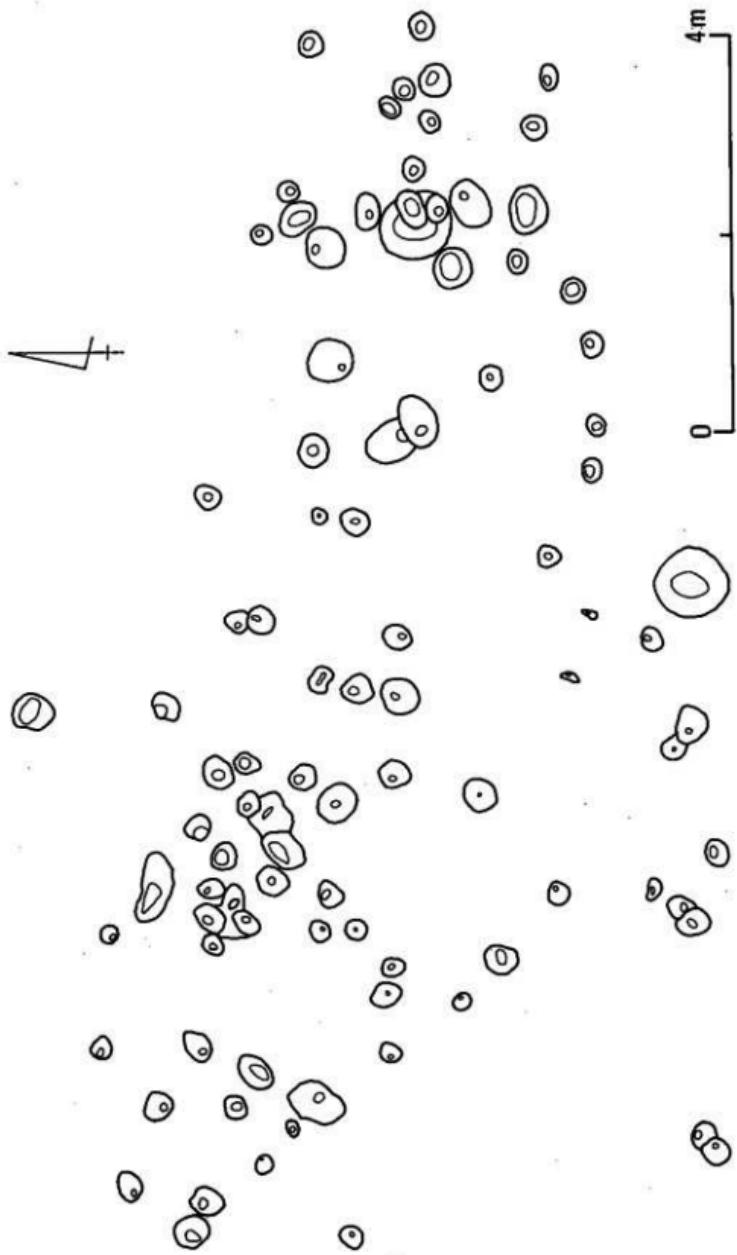
遺構(第13図)発掘区の中央部から西侧にかけて、東西12m、南北8mの範囲から大小90個以上にのぼるピット群が検出された。掘り込み面が第III層上面にあり、その面から炭化物や粘土粒が面的な広がりをもって検出されたことは先に触れたとおりである。ピットはいずれもローム層を掘り込んでおり、径20~40cm、深さ20~30cmの規模をもつ。平面形は概して不正円形を呈するものが多い。配列は雑然としており、明瞭な規則性は認め難いものの、掘り込み面の状態やピット覆土中に扁平な粘土塊や同質の粘土粒が混入していたことなどから、人為的ななものと判断した。ただし、その形状・規模・性格、さらに他の遺構との関係については、砾石が5点検出された以外にそれらを明確にできる資料を得ることはできなかった。なお、9Lグリッド南西隅に位置するピットの覆土上層より、銭貨とともに炭化米が比較的まとまって出土しており注意される。

出土遺物 土器(第12図) 第III層上面より土師器杯2点、土師器皿1点、土師器小皿4点、土師器甕2点、須恵器甕1点、ほかに小破片若干が検出された。1・2はそれぞれ口径12cm、11.4cmをはかる比較的小形の土師器杯である。丸みをもつて立ちあがる体部は内外面ともに口クロ調整が行われ、底面には糸切り痕がみられる。3は土師器皿、4~7は土師器小皿である。6・7は口唇部を中心に煤が付着し、とくに7は内外面におよぶ。8・9は土師器甕。8は内



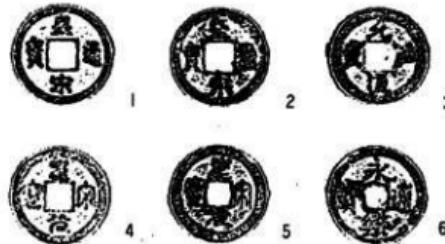
第12図 ピット群出土土器 (1:4)

第13図 ピット群





第14図 ピット群出土石器 (1 : 2)



第15図 ピット群出土銭貨 (2 : 3)

面にハケ目、9は外面に斜位の叩き目文が施される。10は外面に平行叩き目文が加えられる須恵器裏の胴部片である。

石器(第14図) 比較的小形の砥石5点が出土している。5は著しく研ぎ減りしており、砥面には研ぎ方向を示す細かな擦痕や線条痕、さらに断面「U」字状の溝が刻まれている。

銭貨(第15図) 計7点出土している。1・2は「皇宋通宝」、3は「元祐通宝」、4・5は「聖宗元宝」、6は「永樂通宝」である。他の1点は不明。

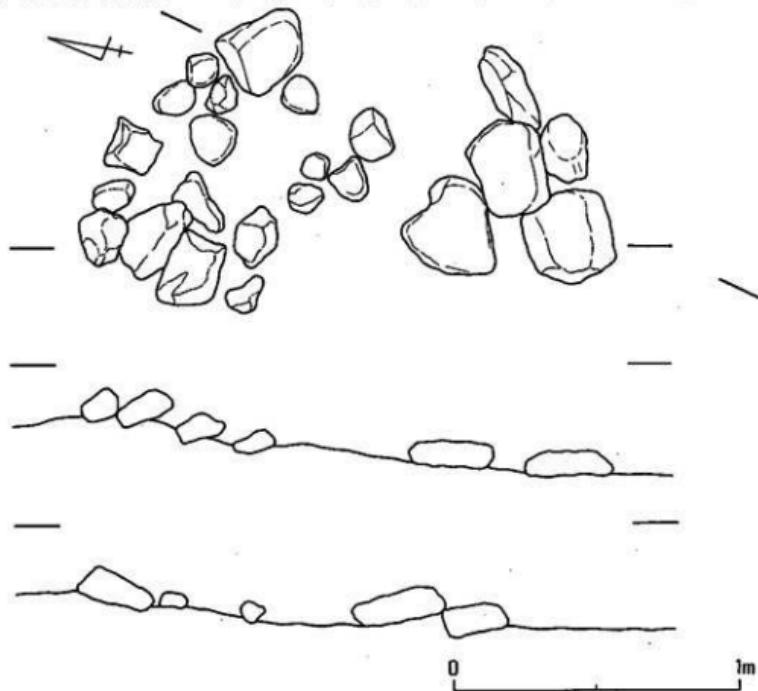
時期 伴出遺物より平安時代中～後期、11世紀後半～12世紀にかけての所産と考えられる。

(百瀬)

### 3. 配石遺構

#### 1号配石(第16・17図)

遺構(第16図) 発掘区北西部に近い10Fグリッドを中心に検出された。東側に接してピット群が位置し、南北方向には1号土壙と3号土壙が近接して存在する。確認面は第III層上面であ

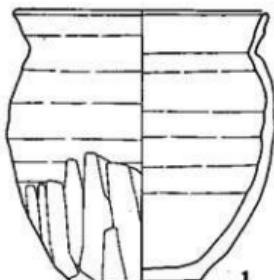


第16図 1号配石

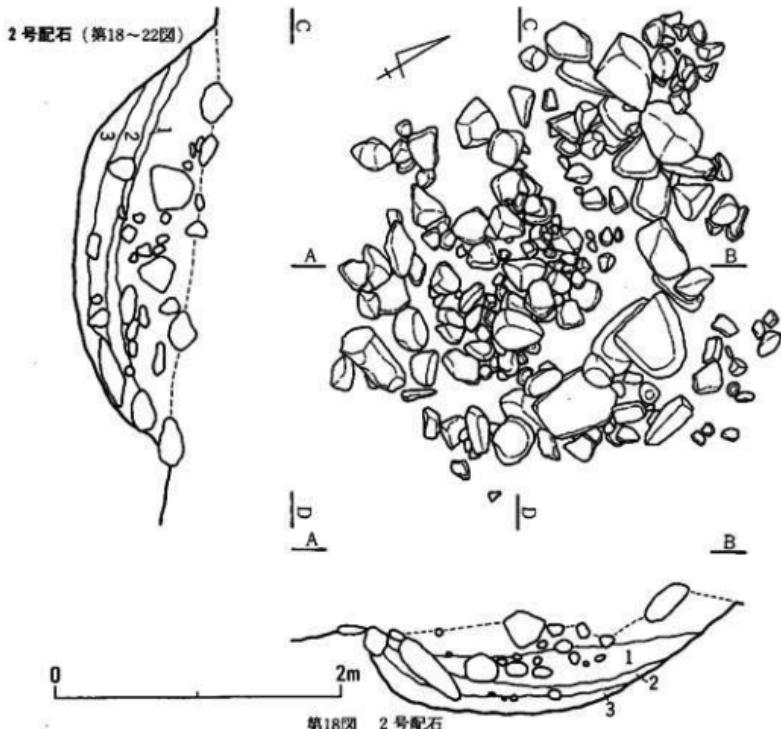
る。形状は、擾乱により遺存状態の悪い南側をのぞき、ほぼ北西-南東に長軸をもつ長方形を呈し、 $100 \times 70\text{cm}$ ほどをはかる。当初住居址に伴うカマドとも考えられたが、焼土の堆積や火熱を受けた痕跡がみられず、本址の性格については周辺遺構との関連とともに、明確にし得る資料を欠く。

出土遺物(第17図) 配石遺構内部およびその南側周辺部より、ほぼ1個体分の土器器表が出土している。口径 $17.8\text{cm}$ 、器高 $18.3\text{cm}$ をはかる比較的小形の壺である。

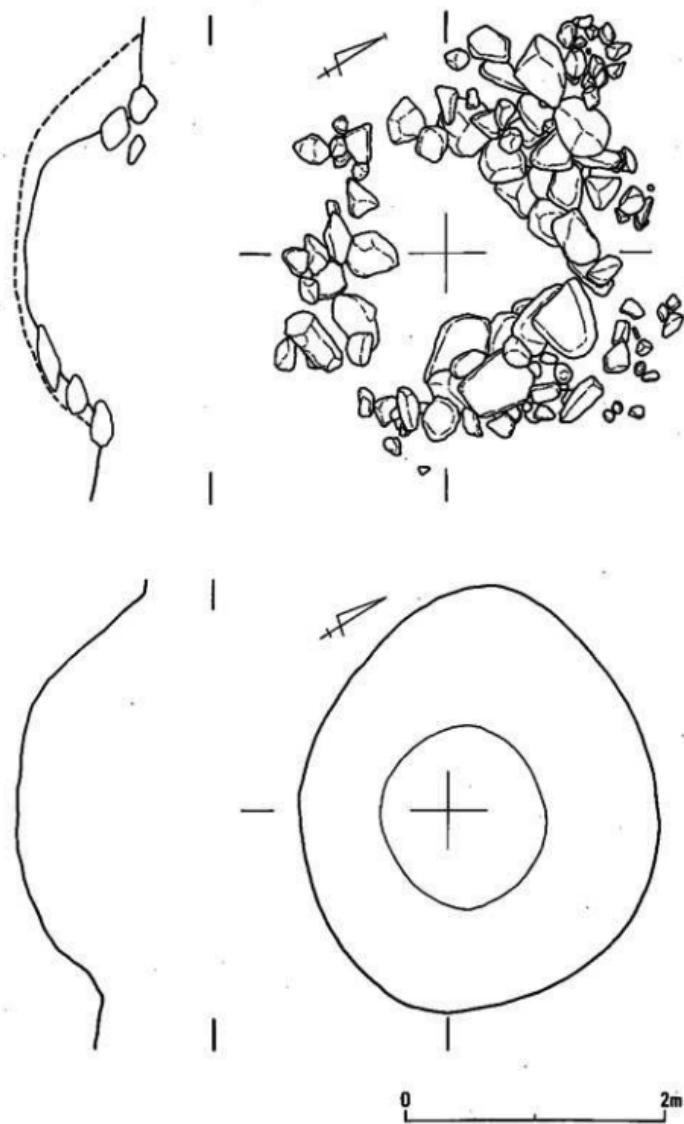
時期 伴出遺物より、平安時代中～後期、11世紀後半～12世紀にかけての所産と考えられる。



第17図 1号配石出土土器(1:4)  
(百瀬)



第18図 2号配石



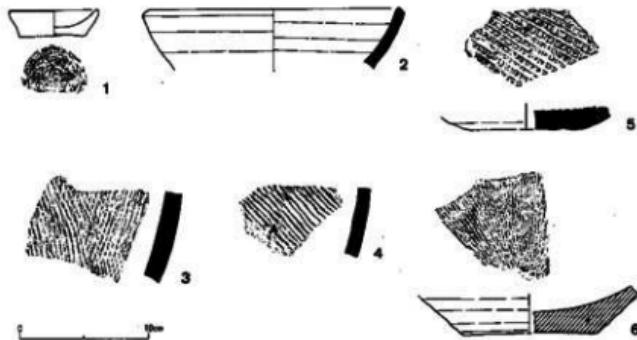
第19図 2号配石・配石部および掘り方

遺構(第18・19図) 発掘区中央北端部にあたる11K・Lグリッドを中心に検出された。確認面は第II層直下、第III層上面である。南西側にはやや間隔をおいてピット群が存在する。規模は長軸を北西—南東方向にもつ、長径300cm、短径250cmの不整橢円形を呈する。長径330cm、短径280cm、深さ70~100cmの不整円形を呈し、断面がゆるやかな鍋底状を呈する掘り方内に構築されており、30~50cm大の比較的扁平な自然石を内側をそろえて積み上げている。石のすき間や掘り方との間には裏込めと思われる10~20cm大の石がためられていた。全体に北西から南東にやや下がる自然地形にそって傾斜をもち、その比高差は80cmほどをはかる。内部の覆土は3層に分かれる。第1層 暗茶褐色土(しまりやや弱、粘性ふつう)、第2層 細かい砂礫を含む暗茶褐色土(しまりやや弱、粘性やや強)、第3層 炭化物粒を含む茶褐色土(しまりやや硬、粘性ふつう)である。覆土中には確認面および第1層を中心として10cm前後の石が多数遺存していた。

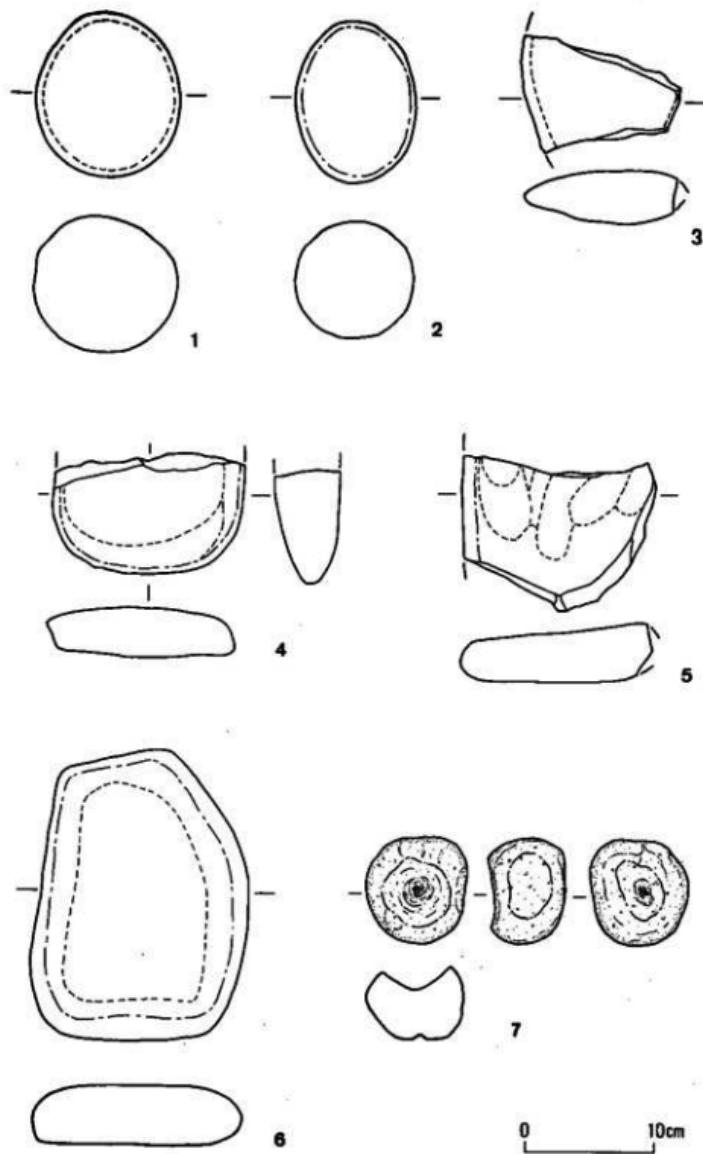
(小磯)

出土遺物 土器(第20図) 覆土中より土師器小皿1点、須恵器碗1点、須恵器甕2点、おろし皿1点、擂鉢1点が出土している。1は覆土下部から出土した土師器小皿である。口3・4は須恵器甕、5はおろし皿である。灰釉が施釉されており、いわゆる中世瀬戸窯系の製品ではないかと思われる。6は擂鉢の底部破片であり、内面に14歯を単位とする櫛目が規則的に施される。

石器(第21・22図) 計11点の石器が出土している。1・2は球状の石製品。ほぼ全面に磨痕が認められる。3~6は両面に磨痕をもつ大形石製品および大形礫である。3・4は周囲を成形して形を整えている。7・8は人為的な凹痕をもつ石製品であり、1・2とセットをなすものと考えられる。7は裏面にもわずかな凹痕が認められる。9~11は鉢形を呈すると考えられる大形の石製品であり、口径は推定30~34cmをはかる。外面の整形はやや粗いものの、内面は比較的ていねいな調整が行われている。本址より検出されたこれらの石器に対する名称につい



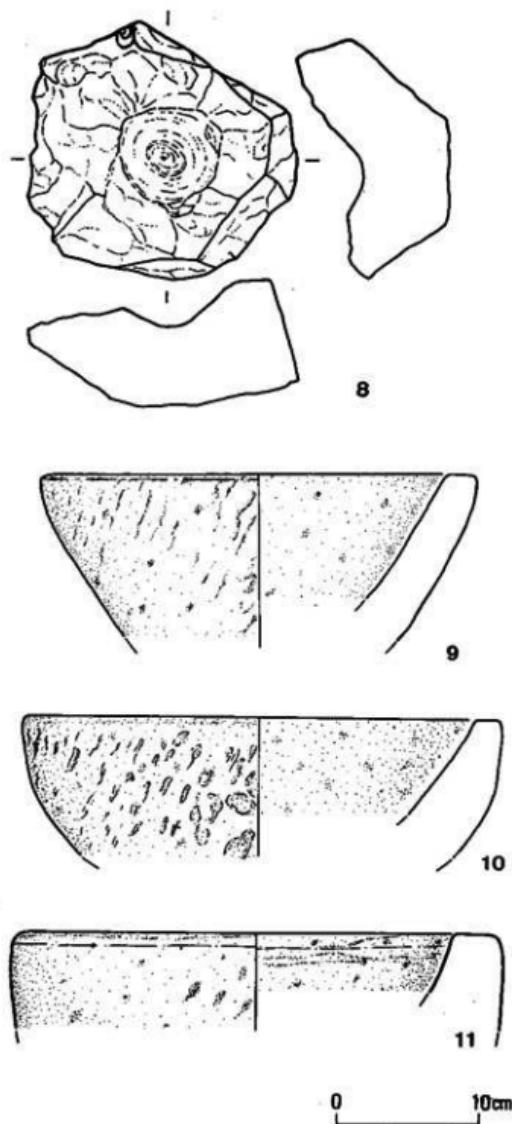
第20図 2号配石出土土器



第21図 2号配石出土石器(1) (1:4, 1・2のみ1:2)

ては、その機能や用途とともに問題を残しているが、ここでは各石器の形態的な特徴の提示にとどめ、具体的な内容については機会を改めたい。

(百瀬)



第22図 2号配石出土石器(2) (1 : 4)

#### 4. 性格不明の落ちこみ (第23・24図)

造構(第23図) 発掘

区南東部にあたる 6 R・

S グリッドに位置する。

西側および北西側には

それぞれ 2~3 m ほど

離れて 4 号土壌・5 号

土壌が検出されている。

南側は砂礫層中に存在

するため明瞭なプラン

を検出することができ

なかったが、規模はお

おむね径 300~330 cm の

不整方形を呈するもの

と考えられる。深さは

18~20 cm をはかり、壁

は比較的急傾斜で立ちあがっている。底面は比較的平坦であるものの、きわめて軟弱であり、

10~20 cm 大の自然石を多数のせている。当初、確認面より灰釉陶器（長頸壺）を含む多数の土

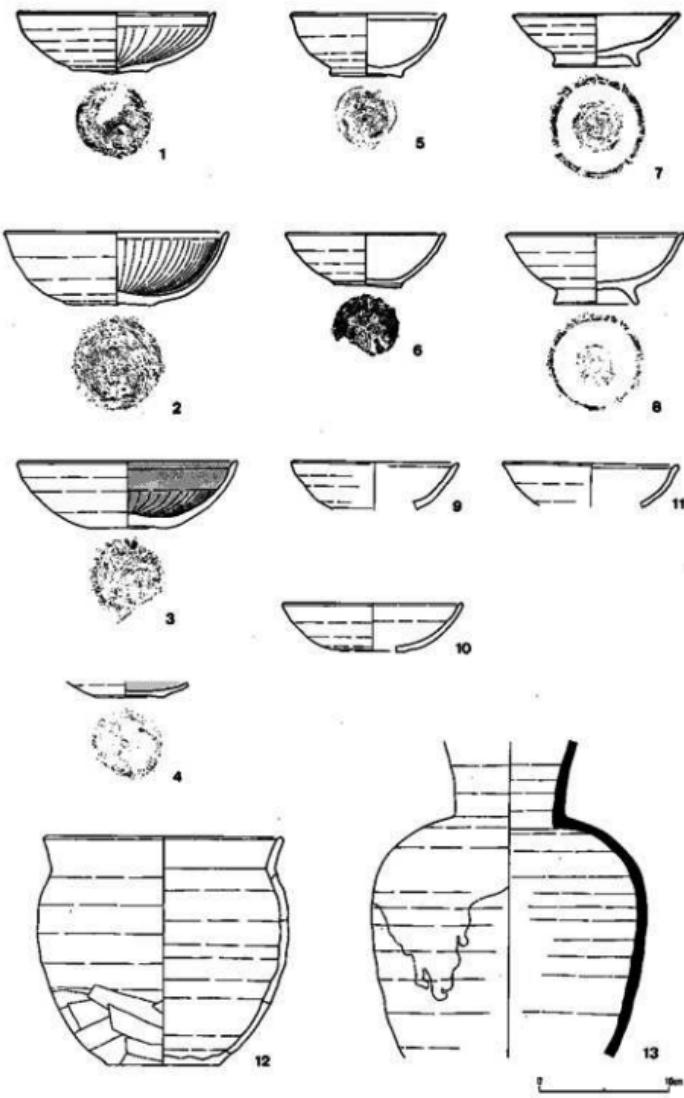
師器が出土し、住居址の可能性を含めて注意されたが、発掘によっては本址の全体的な性格を

明らかにすることは困難であった。

出土遺物(第24図) 確認面より、土師器壺 11 点、土師器甕 1 点、灰釉陶器長頸壺 1 点が検出された。1~4 は口径 15~18 cm ほどをはかる比較的大形の土師器壺である。内面は下部を中心として暗文風の放射状研磨が行われ、3 と 4 は内面黒色を呈する。5~6 は口径 12 cm ほど比較的小形の土師器壺であり、内面は横位を中心とした研磨が加えられる。5 は底部が高い高台状を呈している。7~8 は高台のつく土師器壺である。口径は 7 が推定 13.2 cm、8 が推定 14.1 cm、器高はそれぞれ 4.1 cm、5.5 cm をはかる。外面はロクロ痕をとどめるものの、内面はやや粗い研磨が行われる。12 は器高 17.8 cm をはかる比較的小形の土師器甕である。粘土紐巻き上げ後、回転ロクロ成形を行い、さらに器外側胴部下半に横位から斜位のヘラケズリ整形を施している。13 は長頸壺と考えられる灰釉陶器である。二段構成で、胴部と接合される口部はほぼ垂直に立ちあがり、やや外傾ぎに開く。

時期 伴出遺物より平安時代中頃、10世紀後半~11世紀にかけての所産と考えられる。

(百瀬)



第24図 性格不明の落ちこみ出土土器

### 第3節 遺構外出土遺物

#### 1 縄文時代の遺物 (第25・26図)

##### 1) 土器 (第25図)

発掘区の中央から西側にかけて7点の縄文土器が出土している。

1は地文に縄文が施される菱形土器の胴部破片である。頸部に数条の沈線がめぐり、胴部には多条の沈線によって弧状の文様が描かれる。沈線間は研磨が加えられて縄文が磨消される。地文は原体LRの縄文を縱方向に施文している。色調は外面がくすんだ褐色ないし茶褐色、内面黒みをおびた灰褐色を呈する。器厚は5~7mmと薄手。胎土は砂粒・長石・白色不透明粒子などを含むものの、比較的堅くしまる。器面は外面を中心にしていわいな研磨が行われ、比較的平滑である。縄文時代後期前半堀之内式の新しい段階に比定される。

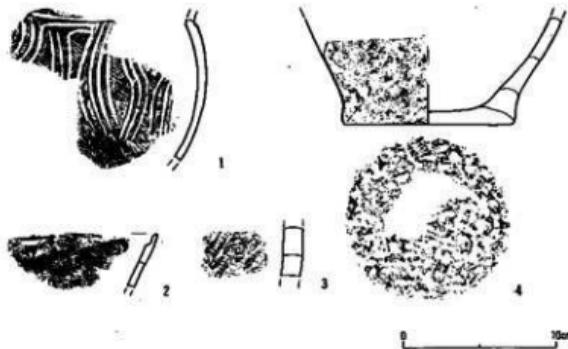
2は菱形土器の口縁部破片。内面の口縁上部に、円形沈刻文を囲むように1条の沈線がめぐる。外面黒みをおびた灰褐色、内面黒褐色を呈し、器面は横方向を中心に研磨が行われる。器厚は4~5mmと薄手のつくりであり、胎土に砂粒・長石・白色不透明粒子などを含む。焼成は比較的堅緻。縄文時代後期前半堀之内式に比定される。

3は原体RLの縄文が施される胴部破片である。時期は中期~後期のものと考えられる。

4は時期不明の底部破片。底径11.5cm、器厚8mmをはかる。外面赤みをおびた茶褐色、内面くすんだ茶褐色を呈し、胎土に砂粒・石英・長石・白色不透明粒子を含む。底面に「2本越え・1本潜り・1本送り」の網状痕を有する。

図示したものはほかに、中期後半に属する小把手が1点出土している。

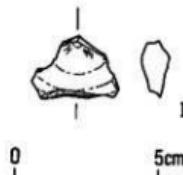
(百瀬)



第25図 遺構外出土土器(1) (1:3)

## 2) 石器（第26図1）

細かな剥離痕のある黒曜石が1点検出された。縦長剥片の頭部破片であり、下端部に微細な剥離が認められる。二次的な加工ないしは使用による歯こぼれと考えられるが、使用痕などは観察できず疑問の余地を残している。

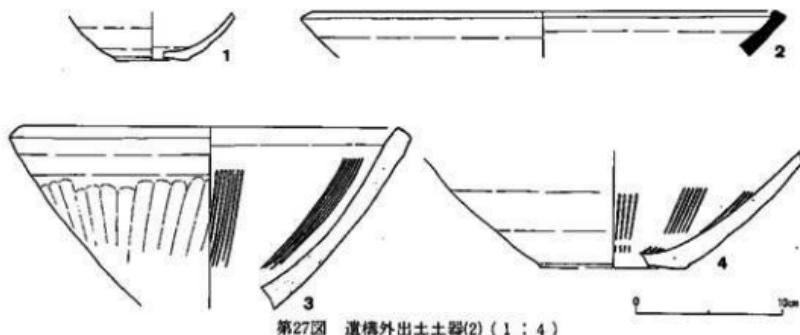


第26図 遺構外出土  
石器（1：2）

## 2. 平安時代の遺物（第27～29図）

### 1) 土器（第27図）

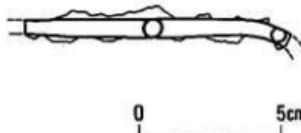
土師器壊1点、中世陶器と思われる鉢1点、須恵器擂鉢2点のほか、外面に叩き目のある須恵器片などの小片が多数出土している。1は内外面にナデ調整が施された土師器壊の底部破片。2はロクロ成形による鉢。3・4は擂鉢であり、3は8齒、4は6齒の櫛目がそれぞれ内面に施される。3は推定口径27.7cmをはかる。



第27図 遺構外出土土器(2)（1：4）

### 2) 石器・石製品

発掘区東端部附近の表土層中より、五輪塔の一部が検出されている。



第28図 遺構外出土鉄製品（1：2）

棒状の鉄製品が1点検出された。現存長9.3cm、径6.5mmをはかる。

### 4) 錢貨（第29図）

8Tグリッドより、「熙寧通宝」が検出された（百済）



第29図 遺構外出土銭貨  
(2：3)

## 第4節 小 括

以上、鐘山遺跡に対する今回の発掘調査により検出された遺構と遺物について、個別的・基本的な説明を行ってきた。本来ならば、より統一的な視野にたってそれらの総括的な把握を試み、遺構や遺物の背後にある歴史的な意義について考察を加えるべきところであるが、今回は時間的な制約もあり、整理中に到達したいいくつかの問題点を提示するにとどめたい。

### 1. 遺構について

くり返し述べてきた通り、総面積 660m<sup>2</sup>あまりをはかる今回の調査では、土壙 5 基・ピット群 1・配石遺構 2 基・性格不明の落ちこみ 1 基が検出された。これら各種の遺構は大きく東西に分かれて存在しており、2 つのまとまりを形成していることが理解される。発掘区北西側に位置し、1~3 号土壙、ピット群、1・2 号配石からなる 1 群と、発掘区南東寄りに位置し、4・5 号土壙、性格不明な落ち込みからなる 1 群とがそれであり、両者は直線にして 7 m ほどの間隔を保って存在している。さらに、各遺構はその占地を異にするのみならず、遺構そのものの属性を大きく異にしている。とりわけ、北西側の一群の中にあってやや孤立的な方を示す 2 号配石は、その呼称の妥当性はさておき、特異な存在として注目される。大形の自然石をほぼ横円形に積み上げておらず、一種の組み石状を呈している。伴出遺物により、平安時代後葉 11 世紀後半から 12 世紀にかけての所産であると判断されたが、その性格については不明な部分を多く残している。発掘の時点では池ないし水利施設の一部とも考えられたが、他に類例を知らない現時点においては速断は避けたい。他の遺構についてもその性格は一切不明であるものの、先にも触れたように、発掘区ないしその付近に寺院が存在したという伝承があることから、寺院に伴う遺構群である可能性も否定しない。ただし、伴出遺物のあり方からすれば、出土した北西側の 1 群と南東寄りの 1 群とは若干の時間差をもっていることが予想され、注意される。

### 2. 遺物について

今回の調査によって出土した遺物は、おおむね平安時代に属するものであった。土師器壺、同甕、同小皿をはじめ須恵器、長頸壺と推定される灰釉陶器などの土器類とともに、砥石、鉄製品、銭貨がそれぞれ検出されたことは先の説明の通りである。ここでは土師器を中心とする土器類について若干の補足を試みたい。

長野県下における土師器をめぐる研究は、今日、一応の編年的基準が確立し、各地域ごとのよりミクロな様相とともに、その背後にある文化的・社会的・経済的な動向が明らかにされつつあるといえる。そうした一連の研究のなかで、本遺跡が存在する東・北信地方について扱ったものとしては、笹沢（笹沢 1976）や川上（川上 1978）の論文などが提出されている。笹沢は善光寺平における土師器を関東地方の編年を援用しつつ 5 様式に細分し、善光寺平第 1 様式

を4世紀代に、同第2様式を5世紀代、同第3様式を6世紀から7世紀代、さらに、8世紀代の奈良時代を同第4様式、8世紀末から12世紀にかけての平安時代を同第5様式にそれぞれ対比させている。一方、川上は笠沢と基本的には同様の編年観・年代観に立ち、千曲川水系における平安時代終末期から中世にかけての“土師系土器”に焦点をあてて、“土師系土器”的去就を論じている。

本遺跡から検出された土師器はおおむね、両氏のいう第5様式に含まれるものであり、器種構成などにやや不明瞭な部分を残すものの、の中でも比較的新しい段階に属するものと考えられる。ただし、発掘区西側に位置するピット群や1・2号配石などから出土した1群と、発掘区南東寄りに位置する性格不明の落ち込みを中心に出土した1群とはその様相を異にしており、注目される。特に、土師器环に限ってみると、第12図1・2に代表される前者は比較的小形で内外面ともにロクロナデをとどめるのに対し、第24図1～11に代表される後者は前者に比べ比較的大形のものを含み、外面はロクロナデをとどめるものの、内面は放射状ないし横方向のていねいな研磨が行われる。本書では両者にみられるこうした法量および、整形手法における粗組の差異を昭闇差としてとらえ、前者を11世紀後半～12世紀に、後者を10世紀後半～11世紀に比定した。こうした年代観に対して、ピット群を中心に前者の分布と重なるように検出された銭貨類は、多少の時間幅を内包するものの、時間的な指標のひとつとなりうるものとして注意される。

以上のような遺構・遺物のあり方は、本遺跡から検出された遺構群が10世紀から12世紀にかけて若干の時間的なズレをもちらながら相次いで構築されたことを強く示唆するものといえよう。

今後は周辺部の調査とともに文献資料などの接近が必要であり、そうした方向性の中から概期における地域的な歴史の一端が明らかにされてゆくことが大いに期待される。

#### 参考文献

- 1976 笠沢 浩 「善光寺平第5様式の土師器とその生産」 上水都誌歴史編
- 1978 川上 元 「土師器什器の展開と終焉」 『中部高地の考古学』長野県考古学会
- 1981 長野県教育委員会・日本道路公团名古屋建設局 「長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——原村・その4——昭和51・52年度」
- 1983 松本市教育委員会・長野県中信土地改良事務所 「松本市寿小赤遺跡——緊急発掘調査報告書」
- 1983 長野市教育委員会・長野市遺跡調査会 「浅川扇状地遺跡群迎田遺跡・川田条里的遺構・石川条里的遺構」

## 第4章 結語

鐘山遺跡は鳥居川により形成された深い谷間の狹小な段丘上にある。この遺跡の調査と成果については本論に述べているように、発見された遺構は土壌、ピット群、配石址である。住居址がなく土壌や配石等の存在は、集落の中心から外れた外郭の諸施設、特殊な場所ではないかと推測される。遺物は土器、石器、鉄製品、錢貨等である。これを時期的に分ければ、縄文時代と平安時代に大別される。この現象をよくみた場合、北信濃の山間地域の山裾や河成段丘上のどの遺跡にもみられるあり方と一致している。即ち縄文時代の前期頃より人間生活の舞台が繰広がり、いくつかの足跡を残しつつ断続的に今日に至っている。特に、縄文時代中・後期、古墳時代の終りから平安時代の活況さが特徴的なのである。

調査を終えてつくづく感じ問題にしたいと思うことは、発見された遺構や遺物を当時の具体的な人間生活に關係づけ、生活の様態を再現させることである。鳥居川を利用し、段丘上に生きた人々、郷や庄園を成立させ、寺院を建立した時代背景、これらは三水村の重要な研究課題であろう。しかしまだ未解決といっていいだろう。三水村は太田郷、太田庄、芋川庄等關係した地域である。また善光寺の存在も気になるところである。これを当鐘山遺跡とどう關係づけ、研究成果をどう組立ててこの未解決の分野に迫りうるか、しかし今のところ他の遺跡の実状も不明確であり、今まで発見された資料の検討や体系化もなされていない今日扱うには無理のところがある。今後遂次調査研究を進めながら成果の累積が必要なのである。

本論でも触れているように、発掘された資料は「これらを關係づけるに（寺院と）否定するものではない」とされている。寺院の當否は別として、平安時代の遺構、遺物の存在は事実である。今日のところの事実を重大なものとして考えていくものとしたい。

この調査は調査主任百瀬忠幸君がほとんど独力で行い、発掘から遺物整理、報告書の作成に昼夜を分たず努力されたことを明記するとともに三水村当局の暖かい理解と協力により本報告書が完成したのである。深謝する次第である。

(岩佐今朝人)

# 鐘山遺跡出土平安時代遺物一覧表 (土器)

## ピット群

No	団版No	器種	法景 口縁 (cm) 高さ	器形の特徴	整形の特徴	1. 砂粒 2. 色調 3. 造成 4. 残存	備考
1	12-1	土器器 环	12.0 5.6 3.7	体部は丸味をもって立ち上 がり、口縁部は外反	ロクロ成形 底部=回転糸切り	1. 砂粒を多く含む 2. 黒褐色、墨灰色部多い 3. 良 4. %	
2	-2	土器器 环	11.4 5.4 3.7	体部は丸味をもって立ち上 がり、口縁部は外反	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ ダ	1. 砂粒・金器母を含む 2. 赤褐色、一部白茶色 3. 良 4. %	
3	-3	土器器 皿	(12.2) (7.5) 3.0	体部は直線的に聞く	ロクロ成形 底部=回転糸切り	1. 砂粒・金器母を含む 2. 白茶色 3. 良 4. %	
4	-4	土器器 小皿	7.8 4.9 1.8	体部はほぼ直線的に聞く	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ ダ	1. 砂粒・金器母を含む 2. 赤褐色、一部淡紅色 3. 良 4. %	
5	-5	土器器 小皿	7.7 5.0 2.0	体部は外側は丸味をもって 立ち上がるが内側は直線的 体底下位が直立し、高台状 をなす	ロクロ成形 底部=回転糸切り	1. 砂粒・金器母を含む 2. 白茶色、一部黒褐色 3. 良 4. %	
6	-6	土器器 小皿	6.9 5.5 1.8	体部は直線的に聞く	ロクロ成形 底部=回転糸切り	1. 砂粒と金器母を含む 2. 淡乳色 3. 良 4. %	口唇部に 一筋ヌス の付着が みられる
7	-7	土器器 小皿	(7.0) (4.2) 1.8	口縁部がわずかに内寄	ロクロ成形 底部=回転糸切り後ナダ	1. 砂粒・金器母を含む 2. 赤褐色 3. 良 4. %	口唇部に ヌヌ付着
8	-8	土器器 皿	— (6.2)	底部片	ロクロ成形 ナダ 底部=回転糸切り後周辺部ナダ 底部内面に一筋ハケ目	1. 砂粒を含む 2. 内面=白茶色。外側=褐色 3. 良 4. 底部%	
9	-9	土器器 皿	—	底部片	内面=ナダ 外側=斜位の叩き目文	1. 砂粒を多く含む 2. 墨褐色 3. 良 4. 底部半片	
10	-10	須恵器 皿	—	底部片	内面=ナダ 外側=平行叩き目文	1. 砂粒を多く含む 2. 暗褐色 3. 良 4. 不明	

## 1号配石

11	17-1	土器器 皿	17.8 8.9 16.3	底部上位に最大径をもつ 口縁部は直線的に聞く	ロクロ成形 下位沿へラケズリ(下→上)	1. 砂粒多く含む 2. 赤褐色、一部白茶色 3. 良 4. %	
----	------	----------	---------------------	---------------------------	------------------------	-------------------------------------------	--

## 2号配石

12	20-1	土器器 小皿	7.1 5.3 2.1	体部は急傾斜で聞くが、内 面は傾斜がゆるやかである	ロクロ成形 底部=回転糸切り	1. 砂粒を多く含む 2. 黒褐色、一部暗褐色 3. 良 4. %	
13	-2	須恵器 碗	(20.6) — —	口縁部片	ロクロ成形	1. 砂粒含む 2. 内面=墨褐色、外側=暗褐色 3. 良 4. 口縁部%	
14	-3	須恵器 碗	—	底部片	内面=ナダ 外側=斜位の叩き目文	1. 砂粒多く含む 2. 墨褐色 3. 良 4. 不明	

No.	回数No.	器種	法縫 (cm)	中径 (mm)	側面 (mm)	器形の特徴	整形の特徴	1. 地土 2. 色調 3. 進成 4. 痕存	備考
15	20-4	兩端部 袋	—	—	—	側面部	内面=ナデ 外面=平行叩き目文	1. 砂粒多く含む 2. 灰色 3. 良 4. 不明	
16	—5	おろし皿	— (9.0) —	—	—	内面に格子状の割縫をもつ	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ 外面=灰褐色	1. 砂粒を微量含む 2. 白茶色 3. 良 4. 底部分	
17	—6	笛 鉢	— (10.5) —	—	—	体部は直線的に開く 内面全体に14後の筋目が放 射状に施される	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ	1. 砂粒を含む 2. 白茶色 3. 良 4. 底部分	

### 性格不明の落ちこみ

18	24-1	土師器 环	(15.6) 6.1 4.8	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がり、口縫部はわずかに外 反 口沿に比し、やや器高が低い	ロクロ成形 内面=放射状のヘラミガキ 口縫部は横位のミガキ 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ	1. 砂粒・全表面含む 2. 淡紅褐色、内面は黒色部多い 3. 良好 4. %	
19	—2	土師器 环	(17.7) 6.9 5.7	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる 口縫部はわずかに外反	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ 内面=放射状のヘラミガキ 口縫部はヨコミガキ	1. 砂粒・全表面含む 2. 白茶色、一部灰褐色 3. 良 4. %	
20	—3	土師器 环	(17.2) 6.0 5.3	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる 口縫部はわずかに外反	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ 内面=上半は横位のミガキ 下半は放射状のミガキ	1. 全表面を多く含む 2. 内面=黒色、外面=淡茶色 3. 良 4. %	
21	—4	土師器 环	— 5.3	—	—	底面部	ロクロ成形 底部=系切り 内面=ミガキ	1. 砂粒多く含む 2. 内面=黒色、上面=淡茶色 3. 良 4. 此部のみ	
22	—5	土師器 环	12.2 5.8 4.9	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がり、口縫部は外反 口縫部内面に接を持つ	ロクロ成形 底部=回転糸切り、高台貼り 付け後周辺部ナデ 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を若干含む 2. 内面=明茶色、外面=淡茶色 3. 良 4. %	
23	—6	土師器 环	(12.7) 5.4 4.2	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる 口縫部はわずかに外反	ロクロ成形 底部=回転糸切り後周辺部ナ デ 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を微量含む 2. 底部褐色、一部黒褐色 3. 良 4. %	
24	—7	土師器 环	(13.2) 9.6 4.1	—	—	体部は直線的に開く	ロクロ成形 底部=高台貼り付け後全面ナ デ 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を若干含む 2. 暗色、内面は黒色部多い 3. 良 4. %	
25	—8	土師器 环	(14.1) 6.7 5.5	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる 口縫部はほぼ直線的	ロクロ成形 底部=高台貼り付け後全面ナ デ 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を若干含む 2. 淡紅褐色 3. 良 4. %	
26	—9	土師器 环	(13.2) — —	—	—	体部はわずかに丸味をもつ て立ち上がる	ロクロ成形 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を若干含む 2. 白茶色、一部淡褐色 3. 良 4. %	
27	—10	土師器 环	(14.2) (5.2) 3.7	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる	ロクロ成形 底部=系切り後周辺部ナ デ 内面=ミガキ	1. 砂粒・全表面を多く含む 2. 淡茶色、口縫部は暗茶色 3. 良 4. %	
28	—11	土師器 环	(13.8) — —	—	—	体部は丸味をもって立ち上 がる 口縫部は外反	ロクロ成形	1. 砂粒・全表面を含む 2. 白茶色 3. 良 4. %	
29	—12	土師器 环	(18.8) 8.8 17.8	—	—	側面部に最大径をもつ 口縫部は直線的に開く	ロクロ成形 外縫=ヨコナナ、下位円ヘラ ケズリ(左→右) 底部=ラケズリ	1. 砂粒多く含む 2. 内面=暗褐色、外面=淡紅褐色 3. 良 4. %	書きあげ 検査により成形
30	—13	灰褐色陶器 長筒瓶?	—	—	—	底部は垂直に立ち上がる 後外縫する 側面部に最大径をもつ	ロクロ成形 口縫部を複合する二段構成 外面に灰褐色を施す 一部褐色を示す	1. 砂粒を含む 2. 灰色 3. 良 4. %	

## 遺構外

No	図版No	器種	法量 口幅 (cm) 底厚 (mm)	器形の特徴	整形の特徴	1. 砂土 2. 色調 3. 陶成 4. 瓷介	備考
31	27-1	土器基 盤	— (5.0) —	底部～底部片	ロクロ成形 底部＝泥転糸切り	1. 砂粒を多く含む 2. 黒色 3. 良 4. 成形	
32	-2	鉢	(33.7) — —	口縁部片	ロクロ成形	1. 砂粒を多く含む 2. 灰色 3. 良 4. 口縁部以下	
33	-3	盤	(27.7) — —	体部は丸味をもって立ち上 がる 内面に7曲の筋目が放射状 に施される	ロクロ成形 外縁＝縫合のナデ	1. 砂粒を多く含む 2. 黑褐色 3. 良 4. 4cm以下	
34	-4	盤	— (10.2) —	体部は丸味をもって立ち上 がる 内面の5曲の筋目が2段に 施される	内・外縁＝ナデ	1. 砂粒を多く含む 2. 黑褐色 3. 良 4. 4cm以下	

鐘山遺跡出土石器一覧表

## 1号土壤

No	図版No	製品名	現存計測地				造存状態	石質	備考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
1	第8図1	砥石	(18.8)	10.5	9.8	3,110	略光形		3面使用

## ピット群

2	第14図1	砥石	(8.8)	3.2	3.2	90	略光形		4面使用
3	第9図2	砥石	(8.6)	3.8	4.3	120	略光形		4面使用
4	第9図3	砥石	5.7	2.6	2.5	60	光形		4面使用
5	第9図4	砥石	(7.8)	4.2	2.2	110	略光形		4面使用
6	第9図5	砥石	5.0	4.7	3.3	70	略光形		5面使用

## 2号配石

7	第21図1	球状石製品	6.1	5.6	4.9	230	光形		
8	第9図2	球状石製品	6.0	4.6	4.2	140	光形		
9	第9図3	磨痕ある大形礫	(8.5)	(12.2)	3.9	420			
10	第9図4	磨痕ある大形礫	(4.5)	7.4	2.5	900			
11	第9図5	磨痕ある大形礫	(5.2)	15.0	4.2	1,220			
12	第9図6	磨痕ある大形礫	11.0	8.2	2.3	3,290	光形		
13	第9図7	石製品	8.2	7.5	5.2	380	光形		人為的凹痕をもつ
14	第22図8	石製品	18.4	16.5	7.9	2,930	光形		人為的凹痕をもつ
15	第9図9	鉢形石製品	30.2	—	(10.4)	700	破片		
16	第9図10	鉢形石製品	33.2	—	(9.6)	620	破片		
17	第9図11	鉢形石製品	34.0	—	(6.8)	650	破片		

注：15～17の計測値は、口径・直径・高さ(各cm)・重さ(g)である。

## 遺構外

18	第26図1	片	2.0	3.0	9.0		黑曜石	
----	-------	---	-----	-----	-----	--	-----	--

## 鐘山遺跡出土鐵製品一覽表

遺構外

No.	國版No.	製品名	長さ(cm)	径(cm)	備考
1	28-1	——	93	6.5	

## 鐘山遺跡出土錢貨一覽表

ピット群

No.	國版 No.	錢名	年代	長 体	破損度	径(cm)	備 考
1	15-1	皇宋通宝	1039	楷 長、	——	2.45	
2	-2	皇宋通宝	1039	楷 疏	微 小	2.4	磨滅
3	-3	元祐通宝	1086	行 書	微 小	2.35	磨滅
4	-4	聖宋通宝	1101	篆 書	——	2.35	
5	-5	聖宋通宝	1101	篆 書	微 少	2.35	
6	-6	永樂通宝	1408	楷 疏	微 小	2.4	
7	——	——	——	大 破	——	——	

遺構外

8	29-1	聖宋通宝	1068	楷 書	微 小	2.25	
---	------	------	------	-----	-----	------	--

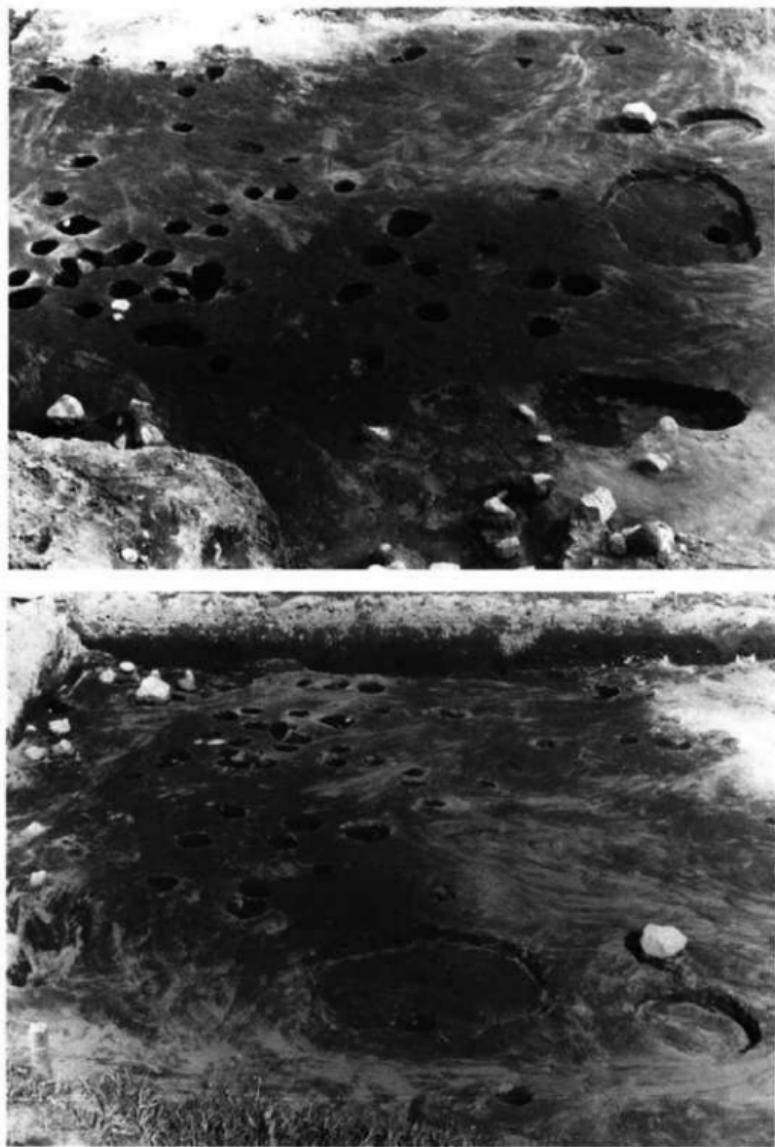
# 図 版

図版一 鐘山遺跡の空撮



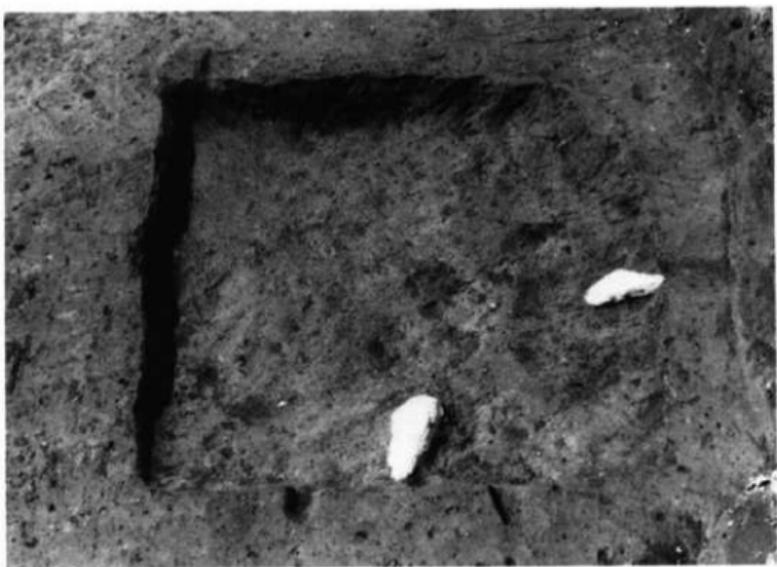


鐘山遺跡（上：遠景 南から、下：近景 北から）

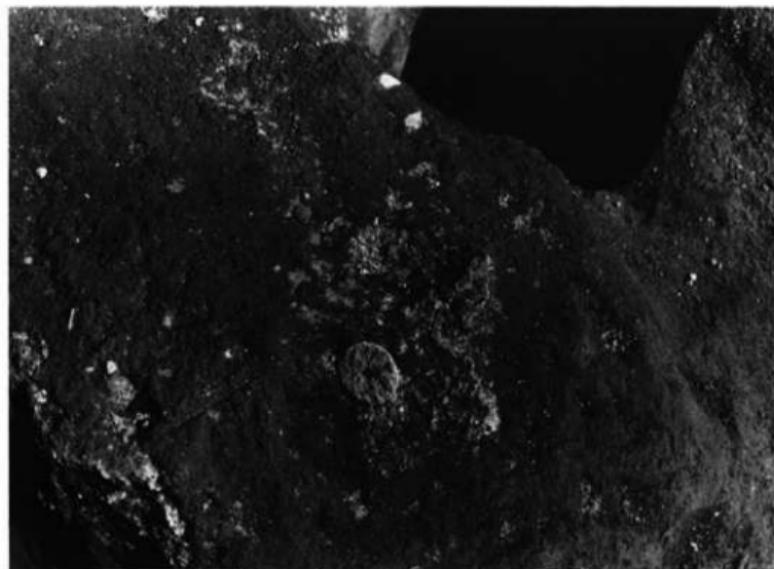


1～3号土壤及びピット群（上：北から、下：西から）

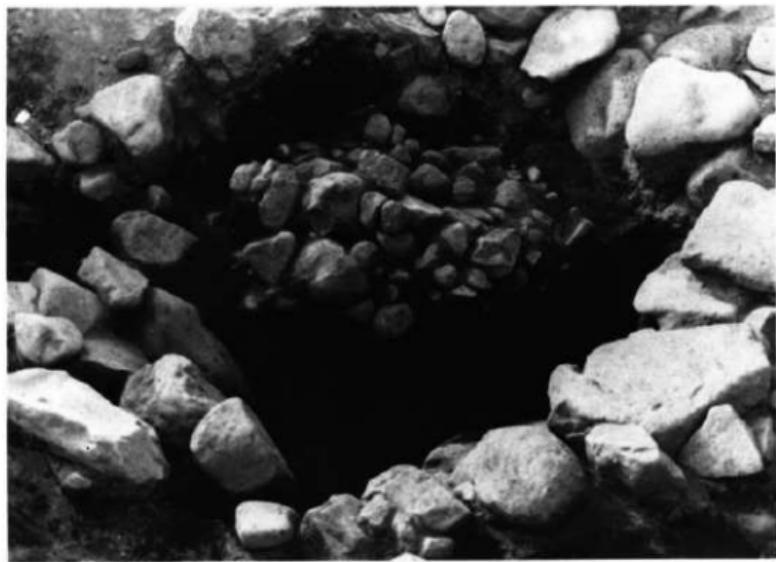
圖  
版  
4



4 号 土 壤



上：炭化米・錢貨出土状態、下：1号配石



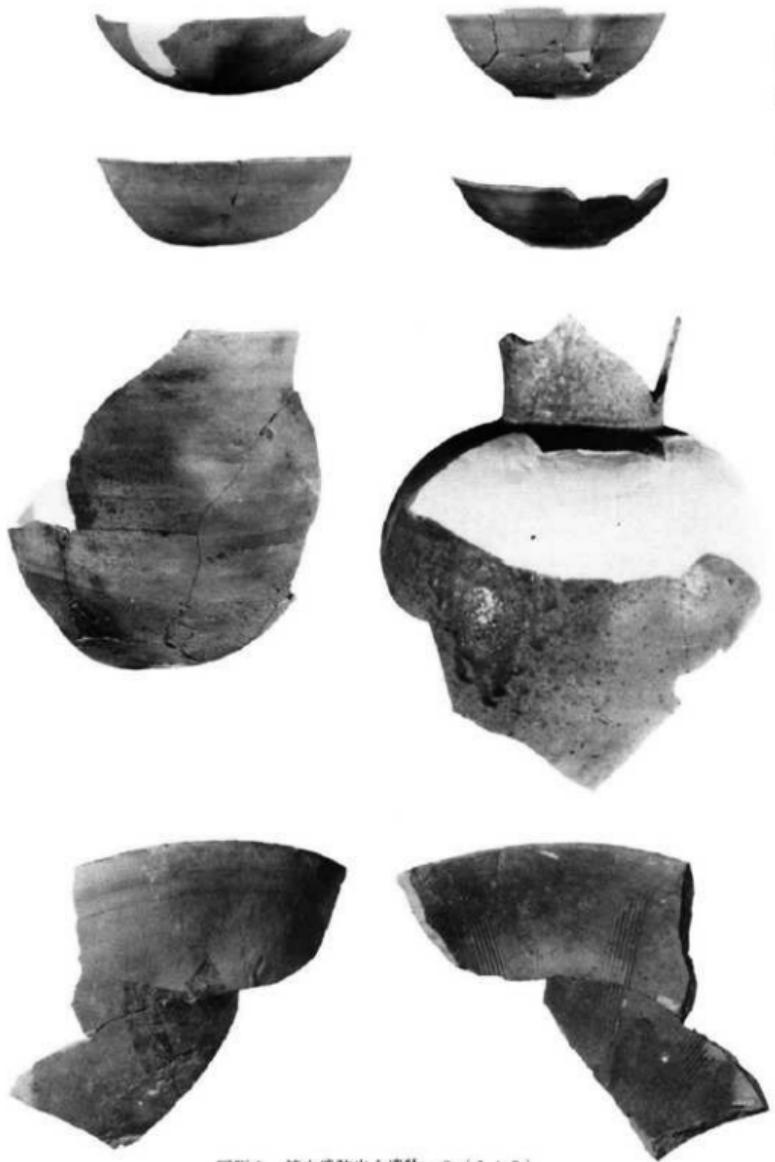
2号配石



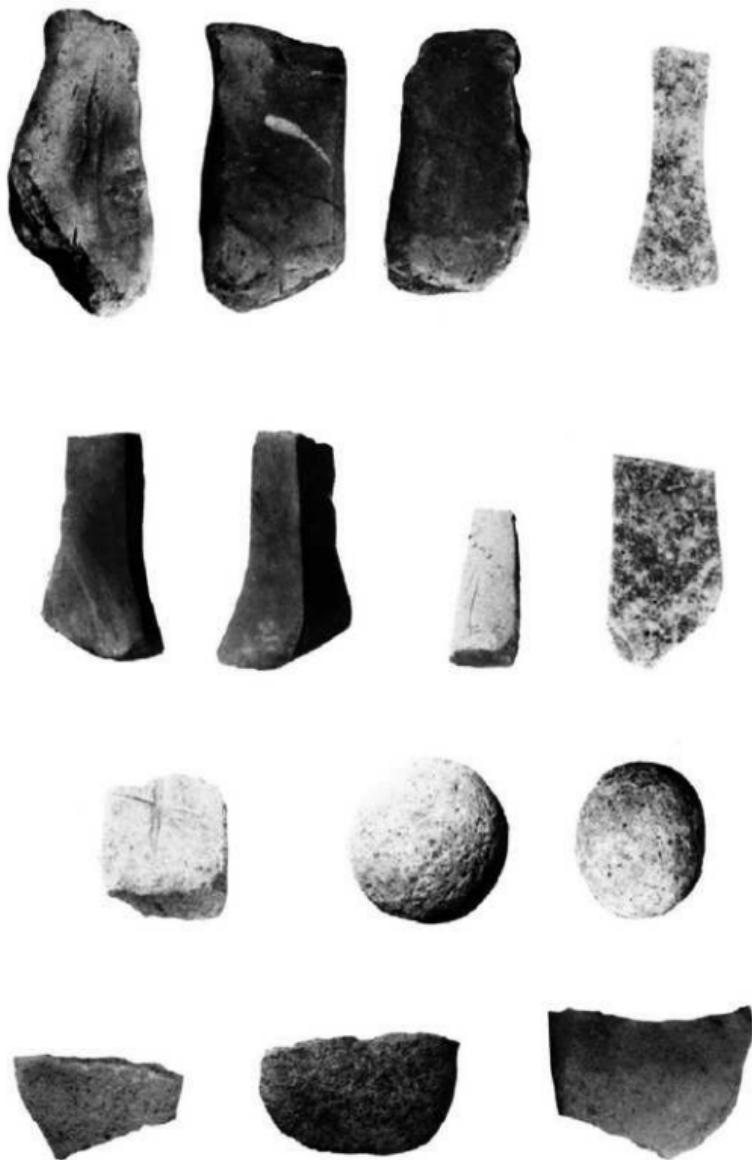
2号配石



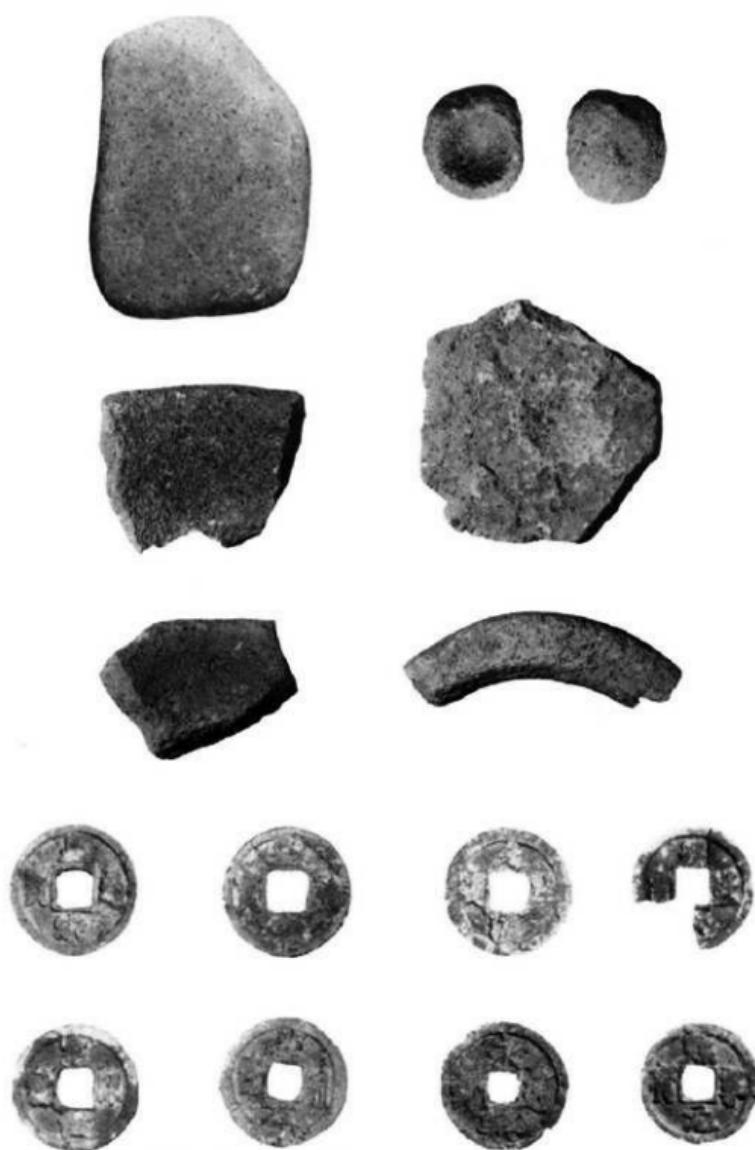
圖版 8 鎏山遺跡出土遺物—1 (1 : 3, 4 ~ 6 + 12± 1 : 2)



図版9 鐘山遺跡出土遺物－2 (1:3)



図版10 鍋山遺跡出土遺物-3 (1:4, 2~8は1:2)



図版II 鐘山遺跡出土遺物-4 (1:4, 銭貨は1:1)



図版12 上：調査風景，下：調査団員

---

三水村遺跡発掘調査報告書 第1集

鐘山遺跡

—緊急発掘調査報告書—

印刷 1984年3月25日

発行 1984年3月31日

編集 三水村教育委員会

発行 鐘山遺跡発掘調査会

印刷 ほおづき書籍株式会社

---

